

うろはんろじー 二〇〇六年版



うろこアンソロジー二〇〇六年版 目次

かくれんぼ	若井信栄	3
イジオート	倉田良成	5
くらいはしけ	海埜今日子	9
膝のした	三井喬子	13
石の下	足立和夫	21
答えと問い。	田中宏輔	24
管制塔鳥	2005年 那覇	石川為丸 25
磔刑ののち	有働薫	29
夕べに光る雨	富澤守治	37
Death・Card	高田昭子	41
博物館へ行く道	水島英己	47
蒼窮の ささやき	TISATO (一瀉千里)	52
明るむ	清水鱗造	55

かくれんぼ

若井信栄

輝く日

放課後の金曜日

あすもあさっても学校に行かないでいいということが
なぜこんなにもうれしいのか
わすれものばかりして叱られた
とりかえしのきかない学校から
風だけをゆるして

草よりも低くかくれた私たち

中庭のにわとりは、かごの中で確実に卵を産みつつけ
教室のこともたちは行儀よくお勉強をしつつけて
私たちはかたくなにかくれんぼをしつつけた

金曜日の放課後

みんな帰ってしまったのに

おなかの痛みが通り過ぎて気づいた

わすれものは

えいえんにかくれた私たち

夕焼けに

ひまわりのうなだれている

放課後の金曜日

こっそり大人に

近づいた日

(詩手帖「飛燕」第3号より)

イジオート

倉田良成

新大久保にあったアルバイト先の下水工事会社は、今まで経験したことのないほどの猛烈な繁忙に見舞われていた。アルバイトではあるがここに来て六年が経ち、定期券で会社に通う立場となっていた私に任された仕事内容は、正社員のそれと選ぶところがない。一か月におよぶ徹夜というか昼夜逆転の工事を含むほぼ半年の間に、与えられた休日は全部を合わせても一週間に満たなかった。夏が過ぎ秋が過ぎ、冬に入るころからふと食事をとることに苦痛を覚えているじぶんに気がついた。あいかわらず休みは取れなかったが、それでもようやく定時に退社できるようになり、酒を飲んで寝ようと思つたある晩、眼をつむつても、刃物みたいなもので首を切

断されたかのような、眠りという感覚から絶対的に切り離されていくみずからを、ある驚きをもって認識した。食えず、眠れぬまま三日ほど過ぎ、あきらかに体力の減衰を感じたので、今夜こそはと大量のアルコールの力を借りたすえに、やっと少しうとうとすることができた。が、確実に遠ざかる楽隊の音のようにたちまち睡気は遠ざかり、半身を起こした暗がりのベッドでじぶんの手の甲から小さな蜃気楼みたいな虹の柱が起つのを見て、深い恐怖を感じた。なにかそのあたりから私の言動に滅裂なものがあらわれはじめたことは、なによりも私自身の感覚として残っている。世界のすべてはあゝる肯定的なすばらしく美しい光明のなかに照り映えて見え、霜月のさむさのしたを、素肌にも綿のシャツをはおっただけで友人の家に行って永遠の友情を宣言し、詩は余技に過ぎないと言いつち、夕ぐれ駅のあらゆる民草に愛を覚えた。そのころから鼻腔の奥に香り蝋燭が燃えているような芳香を感じはじめた。天に穴が空いてこんじきの喇叭が轟き渡るみた

いな心の昂揚は恐ろしいほどの亢進を見せ、見慣れているはずの夜の燈火群が、精神に直結したかたちの視覚器官にほとんど肉体的な苦痛を印すまでに鋭い輝きで飛び込んでくる。何が起こったのだろうかと鏡を覗いたら、私の黒い二つの瞳孔が死人みたいにいつぱいに拡がっていた。私自身には属さない、なにか凄まじい力がはたらいたのだ。信ずべからざる力が。数時間後には、母と姉と姉の家族のいる、名古屋へむかって疾走する夜の新幹線の窓ぎわに顔をうずめ、震えながら号泣している私があった。

下手くそなピアノが継接つぎはぎにする朝

あおぞらの酪酊に呼び醒まされる

眞贋を別けて秋が過ぎふゆが過ぎ

満天のさむさの下で樹が化粧けわいする

危険なまでに人を愛することができるか

真夜中の独語の綺羅めきのうちで

(神様なんぞはいかさまだよ

人間はもっと不合理で

深い)

(そのさなかに書かれた「霜月」全行、一九八二年冬)

「ゆぎょう」第四十四号より(2006・9月)

くらはしはしけ

海埜今日子

むねのようなしたりがこぶねにながれてゆく
どこまでも 大地をあてがい のまれ
わたしたちははなれない

といっせんをひく

やくそくのなかで転換させたかったのだろう

さかなのゆめがついばみました

まだきつとはがれることが

つかんださきから貨物をいらない

うかぶはしでもあつたそうです

みおにそつてねがいただけがついてゆく

せつなにのぼりあるいは
おりたかんしよくがたどりついて
しんどうのそとに
はもんたちがおぼえたのだろうか
といをはっしなかつたわたしの
ながれる

かれのえらがこいしくて
だからきつとまずいとおもった
のころようにしずむこえ
ふるい水がつたえたうわさはいつだつて
ぶぶんてきにはかかえるようです
かきよせかきわけ
だからきつと
もどれないたびについて
しめつたふたをなげたんです

エンジンをもたないふねでしたね
ちゅうとできしむ

いどうがあたりをかえるだろうか
さかなのゆめがきぎまりました

まちがえたものがおしだされ
しゅっこうのまえに躊躇する

うけとつたさきであなた
いらない

むねのようなふたつがはこばれ

なみだつあたりでたわむれる

えいえんにみえかくれする呼吸だった

しめったあいだにつなされた

ひっかいた

せんのごとでわたしをおわり

うきしまのようだとあなたをはじめ

みおをさすっていられるあいだに

ついたふねが距離だった

わたしたちをはなれないものたちの
さいごの貨物がさしだされる

わたししてください もっと もっと

またいだふたがみずにかえり

うたったきずながさかな

とどめるまでのいきかたです

さわった風がひろがるのだろうか

かれのえらがもう

こぶねのゆめをみはじめていた

膝のした

三井喬子

そうーつと襖をあけて

こんばんは

静かに 白いものがやってくる

こんばんは

お邪魔しますと三つ指ついて

すすすすすと滑り込む

ちよつと近道させていただきます

あなたのお膝の柔らかな下から

わたしの実家の庭先にまで

ほら くすぐったい道があるのです

もしもわたしが笑いましたら

前の人の 足の裏を見てください

小さく震えていましたら

ちよいとつついてみてください

ほら

ほら うふふふふ

引っくり返りますか

引っくり返るでしょう 裏返るでしょう

穴が開いてますでしょう あなたの座っていたあとにも

暗い穴が

袖口のような良い匂いのする穴が

お家に帰ろう

お家に帰ろうって言うんです

白い子どもが

早く帰ろうよって言うんです

そこはわたしの生まれた家なのに

子どもが帰りたがるのです

何しろ子ども連れなので ぐずり出さないうちに帰りたくて

そうだ近道しようと思いましたが

あなたが座っていらっしやるので 困ります

困るんです どいて下さい

はなから

騙してでも蹴飛ばしてでも

そこから帰ろうと思いましたが

化粧もし 着替えもし

すぎあらば…

いえ

名乗るほどの者ではございません

以前このあたりに住んでおりましたときに

実家に帰りたいあまりに穴を掘りました

闇にまぎれて掘りました

日がな一日 少しずつ土を捨て

地下水脈をたどり やがて実家の庭先にまで

ああ なんと長い道でしたことか！

お父ちゃんは 腕を組んで後ろを向きました

おお もう大勢の衆の足音がする

去ね 去ね！

お母ちゃんは わたしを抱きしめました

帰しとないのや

帰しとないけど 帰さなならんのが

せめて一晩おんなじ布団で寝たいけれど

それでもやっぱり お帰り

ぶたれんうちに お帰り

もう帰ってくるんじゃないぞ と お父ちゃんはいって

わたしの穴に大きな石を載せました

重たい 大きな石でした

それから 一度も 帰りませんでした

帰れませんでした

孕んだ身体は

孕んだまま塀のかたわらに埋められ

なあんにも 無くなりました

ここに来たのは九月の風のあとでした

埋められたのは翌々年の暮でした

余った漬物石が載せられました

…二つ 三つ 四つ

お母ちゃん と 言うてごらん

もう一回 お母ちゃんと言うてごらん

そんな声を聞いた気もしますが

いくら耳をそばだてても 風の音がするばかり

あれは 空耳だったのでしょか

耳 耳 耳

火のように燃える 耳

こんばんは ちよつとお邪魔をいたします

曇の降る 寒い寒い午後は

性別も知らない白い子どもに急かされて

いえ 急かされるまでもなく わたし自身が

あなたのくすぐったい膝の下から帰りたくて

ちよいと あなたの肩を突いてみました

痛いですか

痛いですか 痛いですか

わたしの爪は伸びていて

割れていて

あなたの柔らかな心を 引き裂くことだって出来るのです

痛いですか

冷たいですか

わたしと わたしの子どものために

そこ

(乳がん患者支援の会のために 耳・耳・耳／2006)
(2006. 12. 23 金沢市民芸術村・里山の家にて朗読)

石の下

足立和夫

石の下の石 ※
地のなかの
ずっと深く
銀を超え
金を超え
恐竜を超え
ぼくの無表情の顔が
崩れそうで
静かに我慢して
闇よりも硬い
岩盤を突き抜け

ダイヤモンドの光を砕き
焼き尽くされてしまおうと
マグマの熱さを
求め祈念して
ほかの顔が
沈黙のなかに浮かぶ
幾千億の顔が
こんなところで
岩の深奥に沈んで
静かに悲しんでいた
そつと横に近づき
自分の顔を並べる
裂けて傷んだままで
涙をもたない悲しみを耐え
表情を消す

※中島みゆきの「わたしの子供になりなさい」にある
フレーズ「石の下の石」に触発されて書いたものです。

答えと問い。

田中宏輔

ドアに向かって、答えがノックする。

問いは、返事をしない。

問いは、たずねる方であって、答える方ではないと思っていたからである。

問いが、答えてもいいかなくなって思ったときには

答えは、ドアの前からいなくなっていた。

管制塔鳥 2005年 那覇

石川為丸

昼になると

軒下の氷柱もとけ始め

光がいたく目にしみる

死んだ者らのまなざしを思慕して

ゆがんだ心の繭をつくって目を閉じた

もう何も壊れるもののない三月

気まぐれな子供らにわすれられた

小鳥のお墓のように

いつのまにか消えていった

管制塔鳥

鮮血の軋みと引き替えに何に

近づこうとしていたのか

駆け上がった

騒乱の

管制塔 鳥

それから

空から

逸れたら

花茎の垂直に

くろずんでいく迅きで

その位置を大きくかえた三月

背信を重ねてひろがる つちふまず

夜明け前から

水晶のかげらをぎしぎし踏んで

退路をひらく

痛むひかがみの丘から

遠く離れたから

転がっている

春を待ちきれずに

枯れた 植木の鉢をかたづけて

管制塔鳥

手遅れにも思えたが

わたしは南へ行くことで

春の

やわらかな泥のなかに

埋葬し終えたはずだった

管制塔鳥

東シナ海へ 海風吹きぬける ここは

陰翳濃い沖繩の街区

遠い

記憶の石礫をはこぶ

群衆の 波打つようにのぼりつめて

うねる坂 うねる

米軍基地の金網（フェンス）の向こうまで

私たちが投擲した

無数の石礫

たち騒ぐ 騒乱の

管制塔

鳥

磔刑ののち

有働薫

マリアの家

「エフェソス都市遺跡のマグネシア門からほぼ4キロメートル、標高358mの山の上、交通手段の極めて不便なところに「マリアの家」がある。エフェソスの住民に代々語り継がれてきた伝説によれば、聖ヨハネはAD37年から45年の間にマリアとともに小アジアへ移り住んだ。山の中の礼拝堂「パナヤカパウル」への道を整備するため地元信徒に重い税の負担が課せられたが、「聖母マリアの最期の地」という先祖からの話を彼らはかたくなに信じた。」

山中のひんやりした空気の中に静かな優しさ

この世を離れた不思議な明るさがただよう

鳥のさえずりが聞こえ

セルチュクの野の清々しい広がりが見渡せる

静かだが寂しくはない

出がけに東京のわが家の小庭に咲いていたのと

そっくりな小菊が同じ黄色に慎ましく咲いている

慎ましいがどこか華やか

優しさに遠い近いはないと思う

マリアの静かさ

四角い石を積み上げた小さな建物のアーチをくぐると

内部は少し暖かく

正面に小さな祭壇がある

小ローソクを買って火を灯し

異教徒ながら瞑目すると

背後から優しい歌がきこえる

いつのまにか青灰色の服の尼僧が

ひとり微笑んでいる

最近この付近に山火事が起こり

幾重にも連なる山々が焼けた

マリアの家のすぐ下の林で

不思議に火が止まったのだそうだ

下山のバスの窓から 焼けた山肌

キャンプの人びとがテントを張り

焼け残りの木々を切り出して積み上げ

斜面を均して小さな松の苗を

一列に植えそろえているのが見える

否定されてはまたよみがえる

伝説のように

伝道者聖ヨハネ教会

「キリストの最愛の弟子で、磔のときただひとり傍に居合わせたヨハネは、キリストよ

り母マリアの保護を託された。そして彼は後にキリスト教の普及に努め、ドミティアヌス帝（AD 81～96）の時代に、迫害によって弾圧された人びとを不満と抑圧から奮起させる目的で「黙示録（アポカリプセ）」を著した。この書は新約聖書の最終巻として編纂されている。AD 100年ごろ、パトモス島での流刑から戻ったヨハネはエフェソスに移り住んだ。彼の死から数年後、彼の名がつけられた最初の教会が墓地の上に建てられた。」

ヨハネの書いた「黙示録」は幻視の書である

彼は流刑地パトモス島で

師イエス・キリストの姿を見た

キリストは炎の燃えるような目をし

足は真鍮のように光り輝いていた

ローマから遠く海を隔てた

このアジアの荒野アナトリアに

信仰の使いを出すようにと愛弟子に命じた

「わたしは死んだが生きている

あなたは生きているとされるがじつは死んでいる

キリストの手には封印された巻物があった

生贄として殺された子羊によって

封印が解かれた

第7の封印が開かれると

ラツパが鳴り響いて 大地震が起り

バビロンの町は崩壊した

生き残ったものは僅かである

エルサレムに新しい都が現われると

諸国の民は聖なる都エルサレムを目指した

キリストは予言する

「私はすぐに来る」と

「イエス・キリストが十字架に架けられた後、弟子の一人であるヨハネはキリストの母マリアとともにエフェソスに来た。そして彼はこの地でキリスト教の布教活動続けた。人びとは彼の死後、アヤスルクの丘の上に彼の墓をたて、その上に大理石を使って教会を建てた。」

大理石は島国のわれわれが思うほど、この地では貴重なものでもない
ここでは手近かな地産地消であることがわかる

それほどぐるり360度 どの山も冷え冷えとした大理石のはげ山である

レバノン杉や木曾谷の檜ならば

宝石以上に貴重だろうが

初期のキリスト教徒は着たきりの貧しい民ばかりである

人々は自力で冷たく固い石を切り出し

熱い信仰心を燃やすことに生甲斐を求めたのだろう

カッパドキア

「アナトリア高原の中心にあるギョレメの谷は、かつてこの地方にあった王国の名にちなんで「カッパドキア（白い馬）」と呼ばれ、4世紀ごろからキリスト教徒が住み始め、岩の中に数多くの洞窟教会を造って信仰を守り続けた。「エルマル・キルセ（りんごの教会）」「ユラナル・キルセ（蛇の教会）」「カラニンク・キルセ（暗闇の教会）」など、11世紀に建てられた教会は保存状態がよく、内部の装飾は見事で、それぞれ特色のある

壁画が描かれている。ゼルベには古くからキリスト教の修道士たちが住み、「ウズムレ・キルセ（ぶどうの教会）」など初期キリスト教時代の教会が見られる。カイマクルにはイスラム教徒の迫害から逃れるためキリスト教徒が住んだ地下8階の巨大な地下都市が、1964年に発見された。他に、ユルギユップ、オルタヒサール、ウチヒサール、ウフラーラ大渓谷などにも、キリスト教徒の洞窟住居や教会の跡が多数見られる。」

予言を信じる者たちは

北のカツパドキアの荒野に散った

人住まぬ奇岩の地下にもぐり

隠れ住み

ひそかに信仰と命をつないだ

彼らの描いたフレスコ画は2000年を生きながらえ

依然としてわれわれの眼に

ひたむきな信仰を触れてくる

さらに東に

東の果ての

信仰のない都市に住む

われわれの渴いたところに

(括弧で括った文章は、REEBER版「エフェソス」および、阪急交通公社ガイドブックによる。)

夕べに光る雨

富澤守治

幸せそうに

飾りつけられた、窓辺の

細やかなところを襲う、冬の雨

激しく

叩きつけるように

覆い尽くして流すように、降る

滝のような瀑布のように、打つか、打たれるか

樹木の葉を洗い

会話を受け流すこともなく

今頃は、どこかで始まったであろう

多くの宴会で吐き出される、笑い声や

あるいは部屋の片隅で痛飲されるビールの

ただ一人飲む杯のように、ひとを酔わせる

迫る闇夜を恐れ、逢魔が時に投げ込まれまいと

子供たちが逃げ惑う騒がしい物音、雨音

しかもあるいは

もうたまらない

恋心を覚え、語りかけてくる、雨の水に薫り

大地に隠されていた地の匂いを馥郁とさせる

遠くに残してきた女の微笑みひとと会話のように

人工の灯りに光って踊り、ときめいて

時雨れる

私の荒れたところにも

浮き上がることのない絶望に枯れた

嘆きにも寄りそってくる

どこか甘いざわめきのアメ

油断すれば冷たく、滲みて

衣服を浸してくる

水晶の哀しみにも似て、なぜか惑い

わが身をまきこむようにして、忍び込む

数え切れない夜を越した

世の繁み

いつか夜半に止むころには

濡れたひと夜の逢瀬

火を灯した窓のなか

あなたと、
いのちに溢れておくれ

Death・Card

高田昭子

★

静かな血の本流が波打つあたりは
耳をあてると とくとくとあたたかい音がする
そこだけにあるやすらかな時間に埋もれて
つかの間 深い罪にいだかれて眠る

★

透きとおった背骨のように
からだのなかを少しずつ貫いて

いのちを支えつつつけているもの
やがてすべてが透きとおるのだろう



その魂の純粹培養室の
入り口のキーは誰にも渡されたことはない
孤独の蘚の増殖 繁茂する沈黙の樹々
最後に残されるものは一粒の玻璃の種子



偽りの優しさはやがて刃物になる
激しさは震えながら涙をながしている
心にぶれてゆく言葉
整えられたものはいつでも遅れて届けられる

★

アポロンの馬車を追いつづけて
向日葵は失明する

決して樹にはなれない
育ちすぎた花茎

★

冬の真昼の窓辺をキジバトが飛んでゆく

翼の蝶番のきしむ音

一筋の傷に似ている鳥の空路

凍てつく手のひらに光の梯子は音もなく降りてくる

★

水子は屈葬のかたちのまま

天の海で母を待ち続けています

母はそこへ辿りつくことはできません

天の道はここからわかれています。



書きながら失ってゆく

あるいは失うものとしての言葉

おびただしい言葉を交わしたとしても

一度きりの死の抱擁を超えることはできない。



言葉の積み木遊びに熱中している

一人は正確に

もう一人は壊すつもりでやっているから
それは死ぬほど辛い遊びになる。

★

この眠りは深すぎる

夢があまりにもあまやかだ

目覚めの扉がなかなか開かない

出口のキーは透きとおっている。

★

赫い西空がまたたくまに沈むと

闇のなかで世界は落下する

たわむ天井 きしむベッド

音もなく微細なものたちが降ってくる

博物館へ行く道

水島英己

博物館へ行く道で

京都からずっと一緒の車両に乗っていた

外国人夫婦に話しかけられた

「ええ、まっすぐです」

「どこから来ました？」

「フィンランドです、小さな国です」

「東大寺で大仏を見てから、この展覧会には行きます」

「また会えるかもしれませんね」

人の波にもまれ、強くてしなやかで華麗な工芸品に見とれる

「緑瑠璃十二曲長杯（正字は土偏だが）」

ミドリリリノジュウニキョクチュウハイと口にする

音楽が生まれる

サイカクノツカシロガネカズラガタノサヤシユギヨクカザリノトウスと口にすると

天平の幻影が私の耳と眼を覆いつくし、あとかたなく

えぐる

フィンランドの夫婦との

再会はなかったが

果てのないアジアの森の中で

私たちは同じ樹木 たとえば

梓の木で作られた弓から

ここに こうして射られた夢の名残として

今を飛びつつあるのかもしれない 夢見ることとは

正倉を持つほどの資力や権力とは関係ないことである

この緑瑠璃のさかづきに満たされたものは何か

十月の終わりの空の遠い青をつらぬく五重塔

ミトラシノ 梓弓ノ ナカハズノ音スナリ

アサカリニ ユウカリニ 今タタスラシ

ここにこうして

射られた弓、射られた夢の名残として

弓の夢、夢の弓

もう一回

私は私を射ることが可能だろうか？

遠くへ

さらに千二百年あまり経過した十月の終わりの今日

正倉院古文書正集か別集の第x巻に

「私は私を射ることが可能だろうか」という私の文字を私は読むことが可能だろうか？

築地のくずれた葎の邸の西の対で

まだ私を待っている女がいる

千二百年余も私を待っている

ハズ

ハズノオトが聞こえる

ナカハズが鳴っているようだ

私は博物館へ入った

人の波にもまれ、強くてしなやかで華麗な工芸品に見とれる

「緑瑠璃十二曲長杯（正字は土偏だが）」

ミドリルリノジュウニキョクチヨウハイと口にすると

音楽が生まれる

サイカクノツカシロガネカズラガタノサヤシユギョクカザリノトウスと口にすると

天平の幻影が私の耳と眼を覆いつくし、あとかたなく

えぐる

私は出口へ向う

「出口がよろこびに満ちるとよい、私は戻りたくない」

“I hope the exit is joyful, I hope never to return.”

蒼窮の ささやき

TISATO (一瀉千里)

ふいに 突き落とされた

暗くて深い部屋に

わけがわからない

次第に かたくなになる

出口が見えない

部屋の壁は どうみても真っ黒

魂の灯火も 見あたらない

両の手を宙に上げて

中に何があるのか 大きく掻き回して
さぐる

好きこのんで 入室したわけではない

何故 こんな部屋に居ることになったのか

祭りは いつの間にか消えてしまった

どこからか はっきりとした怒声

痛みが掟なんだよ

ぬらぬらとしたコールドタールのような

ねばっこく切ないものが

うねるように押し寄せてくる

時々 一部がピンク色に変色する

暗示している 感覚的に

いやでも何でも同化するしかない

急いで 己を仮死状態にする

生き延びる為の最終手段として

本音は 爽やかな風が恋しい

風鈴の音が聞きたい

クリスマスの ハンドベルでもいい

果てしない青空を 自由きままに

手をつないで飛びたい

そのほうがシヨウに合っている

いつからか 感じられなくなった

おきまりの展開なのか

頭を抱えて うずくまる

再び声が聞こえてきた 別な方向から

さつきとは違う声だ

かすかな声で繰り返す しきりに優しく

眼を閉じて じつと耳を澄ませる

やっと聞こえた 確かな声だ

あなたは あなたで いいんだよ

と言っている

明るむ

清水鱗造

水底の澱が

すっかり溶けて

透明に近くなっている

さまざまな生物を跳梁させようと

人間の形にも似せようと

していたのに

放置しているあいだに

劇的な化学変化が

起こったのだろうか

元記録の罫に

かすかに始まった幼生の付着から

一行は始まり

海藻のように多量の別記録が生え

ミシミシと深みに根を張って

元記録を割る

古典を携えた二級酒マンは

昆虫の触角のような大工道具をもち

まず隙間に潤滑花を挿し

くじる

花も溶けて明るくなった